

萩にあしあと残そうよ

「特集…萩往還を歩く③」

令和3年(2021)
5月15日発行
—第25号—
発行：大塚好一

歴史の道「萩往還」を歩くことを決起し、友人と実行してきた企画も第三弾となりました。今回は山口を出発し、瀬戸内海の玄関となる三田尻（防府市）が終点となります。いよいよ完結へー。



中国道の山口IC付近

さて、この日は移動に鉄道を利用しました。早朝、美祢市の友人宅に行き、高校生の娘さんと一緒に駅まで送ってもらいました。厚狭駅から山陽本線と山口線乗り継いで山口駅に移動します。

車で移動するばかりの生活ですから、リュックを抱えて鉄道に乗り込むこと自体が新鮮です。なお、帰日も山陽本線で、防府駅から新山口駅まで鉄路を利用し、夫人に迎えをしてもらいました。

〔山口駅～鯖山峠〕

友人宅を出発したのは午前五時半、山口駅には七時十分に着し、さっそく歩き始めました。駅前通りを一区画歩くと萩往還に合流です。萩と山口との間は山越えというイメージでしたが、今回は比較的平坦な市街地、舗装された道を歩きます。靴はランニングシューズにして、雨の心配もなかったのも荷物も少なめでした。

大内地区では、交通量の多い県道に並行する静かな住宅地を歩きます。歴史を感じられるポイントが乏しく、なんとも単調な道のりに思えるのは、前の二区間が刺激的だったからでしょう。しばらくは冷えた朝の空気の中を淡々と歩いていました。やがて、現代の道と萩往還との交差点、中国自動車道山口ICをくぐり抜けます。



ボックス状のトンネルを3つくぐります。

ICを過ぎたところに終神社がありました。創立年代は不明ですが、藩主毛利氏の姫君が再興した歴史があるそうです。ヒイラギの自然林があって、終という地名の由来になっているとか。



終神社。中央の大樹もヒイラギでした。

* * *

山口ICから鯖山峠までは下小鯖（おさば）という地域です。片側二車線の国道二六二号の喧騒とは対照的に、旧道の萩往還沿いは落ち着いた農村の雰囲気です。日も高くなり、体も十分に温まった旅人を、山を伝ってくる涼やかな風がやさしく撫でてくれました。散歩をしている人、庭木の手入れをする夫婦、堀さらいをする人々などとお会いすることで、往時の旅心を味わうようでした。

そのうち、道はなだらかに上り始め、前方に鯖山峠が近づいてきました。



鯖山峠です。山の合間の中央、くぼんで見える部分を越えていきます。

〔鯖山峠（郡境）〕

鯖山峠（さばやまとうげ）は、現在は佐波山峠と表記されます。明治二〇年（一八八七）に「佐波山洞道」が完成し、以後改築や新隧道開削を経て、上り下り別の二本のトンネルが貫通しています。

萩往還のルートは、トンネル脇からの狭い坂道となります。天正年間（一五七四頃）には関所があり、茶店や駕籠建場等もある、ひとつの小さな村だったそうです。



山口市、防府市境。

郡境（こおりざかい）の碑に到着しました。くつきりと「従是北吉敷郡、従是南佐波郡」と刻まれています。享和二年（一八〇二）に建て直したものであること。見晴らしも良く、明治天皇の御小休所跡の碑もありました。鯖山峠を越えればあとは瀬戸内海に向かって下るのみです。時刻は十時五十分でした。

〔鯖山峠～三田尻港〕

防府市に入ると、ずんずん下って行きます。車では感じられませんが、かなり勾配のある長い坂です。勝坂（かさか）という「勝坂砲台跡」の案内板を見つけました。

↓文久三年（一八六三）、長州藩は藩庁を萩から山口に移しました。そして、防備のために勝坂に関門を設置し、高台に砲台を築きました。現在も石垣や土塁の一部が残っています。



鳥居の先に 100m ほどの参道。
後方の山は右田ヶ岳 (426m)

さて、左側の上方には右田ヶ岳がそそり立っています。岩肌が露見する荒々しさが目を引きます。この山はとにかく眺望がすばらしいと評判です。ぜひ登ってみたいねと話しながら歩きました。

沿線は古くからの集落である証拠に、お地藏様を祀るお堂が点在していました。よく手入れされ、人々の信仰の厚さが伝わります。手を合わせでは通過していきました。

* *

山陽新幹線の下をくぐったところに剣神社があります。この日は参拝をすぐに去りましたが、引かれるものがあり後日再訪しました。由緒書きによると、延喜式に登場されている式内社とのことで、大内氏や毛利氏も代々尊崇していたそうです。

剣神社を後にすると、ほどなく国道二号線と山陽自動車道を立体交差で横切り、佐波川の岸辺に出ました。

かつて、渡りで越えていた佐波川に、享保九年(一七二四)に木橋が架けられました。しかし、洪水のたびに流失したため、寛保二年(一七四二)に六艘の船を並べて板を渡した「舟橋」が作られました。大水が出ると切り離して岸に引き寄せ、水が引いたら架け直すという珍しい橋でした。長さ三八mで、戦前まで使われていたそうです。



左下の看板辺りに舟橋がありました。右は本橋。

ここで正午を迎えました。七時過ぎから歩き始め、途中間食もしましたが、疲れもあるしお腹も空きました。そこで、本橋を渡った先にある知人が営む店へ入り、アツアツのピザをいただきました。良いタイミングでした。

店を出て歩き始めるとすぐに山陽道と交わります。約1kmの重複区間があり、防府天満宮の前で再び分かれます。山陽道は参勤交代の往来もあり、ここには藩の指定旅館である本陣や脇本陣がありました。幕府の役人や九州の諸大名が宿泊したそうです。



防府天満宮に参拝。

萩往還は防府天満宮の正面に伸びる通りへ向きを変え、商店街のアーケードを抜けていきます。防府駅にも近い山陽本線の高架をくぐり、さらに南下してまもなく、三田尻御茶屋に到着しました。午後二時二〇分でした。

◆三田尻御茶屋(英雲荘)◆
三田尻御茶屋は、萩藩二代藩主毛利綱広が、承応三年(一六五四)に設置しました。御茶屋とは、参勤交代や迎賓の宿舎等に使用する公館です。

以後、藩主の隠居所となったり、明治以降は毛利家の三田尻別邸となったり、様々な変遷をたどりました。

昭和に入り防府市に寄贈され、現在は縁の深かった七代藩主重就の法名より「英雲荘」と命名されています。檜皮葺二階建ての大観楼棟や、離れの茶室花月楼、そして百年ぶりに水が張られたばかりという庭園など、目を見張るものばかりでした。



江戸～大正期の建築が保存されています。素晴らしい。

この日の歩行はここまで。防府駅まで戻り、列車で新山口駅に到着したのは四時三十分でした。長く充実した一日となりました。

後日、車で再び防府を訪ねました。三田尻御茶屋から約五百m離れたところにある、三田尻御舟倉跡を見ておきた

かっただけです。ここに藩主の御座船や軍船が置かれ、海の玄関となっていました。周辺は江戸時代から干拓が進められ、今や住宅地の中でひっそりと時を刻んでいます。



三田尻御舟倉跡(後日)、隣に児童公園があります。

「歩みを終えて」

萩往還をひととおり歩くという念願が叶いました。車ならば一時間半ほどの道のりですが、歩けば一泊や二泊を要します。それが不便ではなく、当たり前でした。こうして、実際に歩くことによって、人々が歩いていた時代の感覚を肌で味わえたことが、一番の収穫だと思いました。



満足です。

(歩行日 五月三日)